

うみと水にそく

Suma
Aqualife Park
in KOBE

もっと知ってスマスイ

2016
3

March

特集
SPECIAL ISSUE

特別展

「須磨怪奇水族園 —古今東西！ 水辺の妖怪展」 を開催しました

トピックス

- 公開シンポジウム「『イルカ学』水族館からのアプローチ
～水族館と大学とイルカの関係を考える～」を開催
- 亀崎前園長による一風変わった特別さかなライブ！
- ILLUMINAGE COUNT DOWN!! 2015-2016
「新年をスマスイで迎えよう with 須磨アクアイルミネージュ」
- 干支展 申 ～水にすむサルたち～

研究の窓

知られていないけれど
一番身近な小さなクジラ
—アンケート調査から見えてきた
スマメリの認知度—

スマスイ
生物図鑑

Part
24

アマクサクラゲ、キハツク、ファロウェラ・ビッタータ、
タイリクバラタナゴ、ペーシュ・カショーロ

須磨の海②「省エネルギーなマナマコ」

神戸の川②「カワムツとヌマムツ」

出張見聞録「ウミガメの国際シンポジウムで
訪れたトルコ共和国」

スマスイ職員名鑑「私が水族館で働く理由」



特集

SPECIAL ISSUE

社会教育課
和食 萌

特別展 「須魔怪奇水族園 —古今東西! 水辺の妖怪展」 を開催しました

開催期間／2015年7月18日～11月8日

圧倒的な水量をたたえる河。綺麗だけれど底が見えない淵。真っ黒で吸い込まれそうな夜の海。そして、その水底に潜む正体不明の生きものたち…。皆さんは、水や水の中の生きものに対して恐怖感を抱いたことはないでしょうか。2015年度夏秋の特別展は、「須魔怪奇水族園—古今東西!水辺の妖怪展」と題し、水にまつわる怪異を取り上げました。



会場入口→



→写真1
河童の
リアル模型

なぜ水族館で妖怪なのか

「水族館と妖怪、関係あるの?」という人もいるでしょう。そもそも妖怪の多くは、人間の自然に対する畏怖の念から生まれています。その中には、実在する生きものと関係がある妖怪もいます。「スマスイの生きものとふれあった後、彼らと人間との狭間にいる妖怪についても肌で感じてもらいたい」と、水辺に出現する妖怪を中心とした特別展を構成しました。

展示室の奇妙な資料

薄暗い展示室に並ぶ資料は、今までになく多種多様に。主に江戸時代に描かれた古い絵、親しみやすい解説文、水族園らしい生体を中心に、特別に作った模型や他園館から借りた貴重な標本資料など、あらゆるタイプの展示品が一堂に会する、博物学的な展示となりました。

河童、人魚、クラークン、などなど

本展では約100種の怪異を紹介しました。水辺の妖怪の代表格といえるのが河童です。頭に皿を持ち、甲羅を背負った姿(写真1)は、スッポンなど大型のカメ類と似ています。そこで甲長40cmほどのスッポン(写真2)を展示しました。また目撃情報のある、全身が赤毛で覆われた河童は、絶滅した二ホンカワウソと関係があるといわれているため、その貴



←写真2
二ホンスッポン



↓写真3
二ホンカワウソの剥製
(愛南町教育委員会所蔵)



←写真4
河童のミイラ
(明石市立文化博物館所蔵)

重な剥製(写真3)を展示しました。また、海から上がった河童のミイラ(写真4)も展示しました。

そして、17世紀のヨーロッパで話題となったエイの干物「ジェニー・ハニヴァー」(写真5)は、干物だけでなくガンギエイの生体も展示しました。

また、ヨーロッパの海の怪物クラークンの正体はダイオウイカともいわれます。京都水族館が保管していた個体を、株式会社伍魚福の協力のもと、スルメ…ならぬ、乾燥標本(写真6)にして展示し、話題となりました。

人魚といえば美しい人魚姫のイメージが強いですが、実際は恐ろしい怪物(写真7)です。その姿に大泣きするお子さまもいました。旧家に伝わっていた貴重な人魚のミイラ(写真8)は、下半身がオコゼ類、歯がタイ類、上半身が紙や木で作られていることがX線解析で判明しています。

他にも、40本近い腕を持つタコの標本と、ユニコーンの角といわれたイッカクの牙の標本(写真9)のほか、不思議な力をもつガマガエル、平家の落ち武者の怨霊がとりついたヘイケガニ、地震と関係があるナマズ、そして現代に生きる怪奇生物ともいえるミツクリザメの標本(写真10)など、ここでは挙げきれない数の怪異を紹介しました。

なお、職員に募集した「スマスイ七不思議」も公開し、お客さまに暑い夏に涼しい思いをしていただきました。

妖怪展を終えて — 視点を変えることの意義

妖怪と聞いてお化け屋敷を連想し、拍子抜けで出ていく方もいましたが、アンケートでは多くのお客さまから「面白かった」「またやってほしい」との声が上がりました。妖怪は人間が生み出しただけあって、興味を引くものようです。常識を覆すような妖怪たちを知ることは、人間の営みを理解するとともに、柔軟な視点から物事を捉える広い目線を養うことにつながる…かもしれません。これからも、幅広い活動を行っていききたいと思います。



↓写真5
ジェニー・ハニヴァー

↓写真6 ダイオウイカのスルメ、ならぬ乾燥標本



→写真7
夢を壊す、人魚のリアル模型



↑写真8 人魚のミイラ(原野農芸博物館所蔵)

↓写真9 イッカクの牙(鳥羽水族館所蔵)



↑写真10
現代の怪奇生物、ミツクリザメ

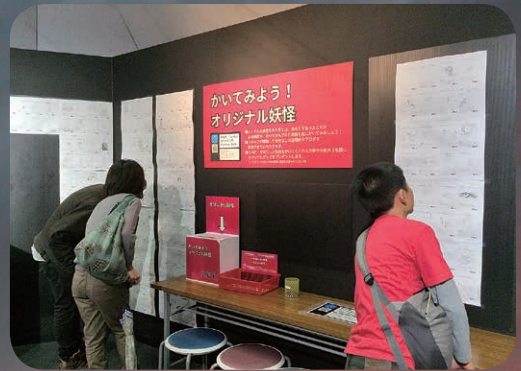


投稿コーナー、グッズも満載

特別展の一角には、お客さまに、自身で考えた妖怪を描いてもらう関連企画を設けました。予想の斜め上をいく妖怪ばかりが出そろい、非常に好評でした。

関連グッズとして、パンフレットとスタンプラリーが合体した妖怪御朱印帳や、妖怪と生きものがコラボしたノート、人魚をあしらったペン、そして会場で引ける「妖怪みくじ」を用意しました。

↓オリジナル妖怪投稿コーナー



妖怪みくじ



↑妖怪御朱印帳・ポストカード・クリアファイル



←ペン

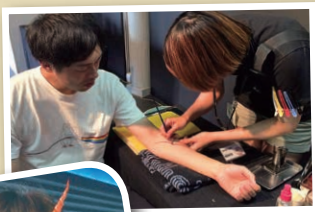
↑ノート

関連
イベント

怪奇！ 妖怪メイク体験

開催日=7月18~20日、
8月15、16日、9月26日

「妖怪を知った後は妖怪になってみよう!」という意図のもと、本展の模型も手掛けた創作ユニット、大衆SHOCK堂による特殊メイク体験を催しました。頭には角、手には水かきなどを着けて妖怪になることができ、体験したお客さまは満足の様子。妖怪に変身した姿を見て、他のお客さまも驚いていました。



夜のスマスイで 桂吉弥落語会

開催日=9月11日

妖怪は日本人の文化と昔から深く関わってきました。スマスイではなかなか味わえない伝統文化を知っていただくこと、桂吉弥さんの落語会を開催しました。妖怪のテーマに合わせた播州皿屋敷の怖くて面白い話に、会場は静かになったり笑いが巻き起こったりと大忙しでした。スマスイでの落語会は初めてでしたが、老若男女の皆さんに楽しんでいただけました。



第28弾サイエンスカフェ 河童、人魚、水界の 妖怪たち

開催日=9月26日

妖怪博士で知られる、香川雅信氏(兵庫県立歴史博物館)を招き、民俗学の視点から水にまつわる妖怪についてのマニアックな話をしていただきました。おなじみの河童をはじめ、サメやイルカにまつわる妖怪や、聞いたことのないような名前の妖怪も登場し、集まった妖怪好きの皆さんも熱心に聞き入っていました。



1
TOPIC



公開シンポジウム 『『イルカ学』水族館からのアプローチ ～水族館と大学とイルカの関係 を考える～』を開催

開催日=2015年10月30日・31日

イルカについての研究活動を知ってもらうことを目的に、京都大学野生動物研究センターと共催でシンポジウムを行いました。1日目は職員が分類、生態、行動、繁殖、トレーニングについて講義し、2日目は大学や当園が取り組む調査研究活動を報告。さまざまな分野の人が集まり、イルカの研究を通して交流を深めました。

↓ 研究員によるイルカの音響分析についての発表



↑ シーパル須磨での研究発表

職員による大水槽前の講義→



2
TOPIC

亀崎前園長による 一風変わった特別さかなライブ!

開催日=2015年11月3日

28年続いた「さかなライブ」がリニューアルに向けて一時閉鎖することになり、その最終回に満を持して亀崎前園長が登場しました。魚の捕食行動の進化について、パンを使い、食べながら解説をするという予想もつかないライブで、千秋楽を飾るにふさわしい盛り上がりとなりました。



3
TOPIC

ILLUMINAGE COUNT DOWN!! 2015-2016 新年をスマスイで迎えようwith 須磨アクアイルミナーズ

開催日=2015年12月31日～2016年1月1日

生きものたちと新年を迎えるカウントダウンイベントを開催しました。新たな年に向けて盛り上がる中、ターザン山下さんによるDJショー(本館)、大道芸パフォーマンス(お弁当広場)が行われました。4Dレイトマップの上映の後、カウントダウンイルカライブを実施し、1,200人のお客さまと一緒に豪快なイルカのジャンプで2016年を迎えました。

↓ ターザン山下さんによるDJショー

↓ イルカのジャンプで2016年スタート



4
TOPIC

干支展 申 ～水にすむサルたち～

開催期間=2015年12月4日～2016年1月12日

2016年の干支は「申」。ここは水族園、本物の展示とはいきませんでした。水にすむサルにちなんだ生きものを展示しました。また、本物そっくりなサルの模型と一緒に記念撮影ができるコーナーも併設しました。水の世界のサルたちをご覧ください。新たな年の縁起を担いでいただけただけではないでしょうか。

↓ 開催風景

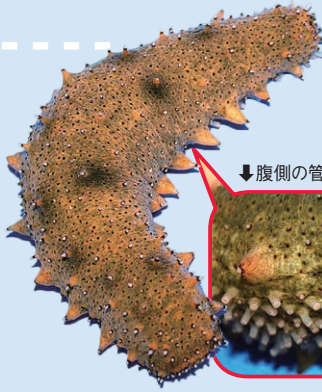


← Monkeyfish (ダルマオコゼ)

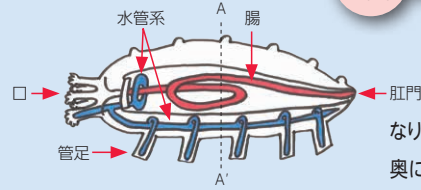
省エネルギーなマナマコ

当園には本館3階にタッチング水槽があり、数種の生きものに直接手で触れることができます。その中でマナマコは、ヌルヌルした感触が気持ちよくも悪くもあり、人気を集めています。マナマコは北海道から九州にかけての浅海域に広く分布し、須磨の海にもたくさん生息している一番身近なマナマコです。

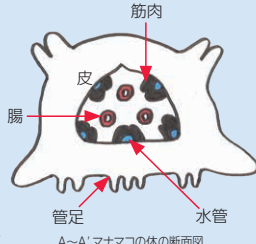
マナマコは棘皮動物というヒトデやウニと同じ仲間分類されます。体表の皮の部分には骨片と呼ばれる、顕微鏡で見ないと分からないほどの小さな骨が2,000万個もあり、骨片と骨片はキャッチ結合組織という体表の硬さを瞬間的に自由に変えられる組織でつながっています。また、皮の内側には、体軸と平行に走る細い筋肉が5対あり、五放射相称という棘皮動物特有のつくりになっています。さらに、体内に取り込んだ海水が流れる管(水管)が体中に張り巡らされており、これを水管系と呼んでいます。そして体外にまで伸長している部分は管足といいます。管足は体全体にあります。特に腹側に多く存在します。腹側の管足の先端は吸盤状になっており、物をつかむこと



魚類飼育課 亀井あずさ



マナマコの体の模式図
ナマコガイドブック 本川達雄(2003)より改変



A~A' マナマコの体の断面図
ナマコ学 高橋明義(2012)より改変

ができるので、移動や餌を口に運ぶことに使われています。管足の一本一本はとても細いものですが、無数にあるため、垂直な岩に張り付いて体を持ち上げるなんてことも簡単にできます。こんな変わった特徴をいくつも持っているマナマコですが、一番特徴的なのは、とにかく省エネルギーを徹底しているということです。1分間で約10cmというゆっくりとした移動しかしないため、動くためのエネルギーはほとんど必要ありません。ですから餌は砂の中の有機物で十分です。それでも水温が上がる夏の間は、代謝も同時に上がり、動いていると無駄にエネルギーを使うことに

なります。そこで、岩の隙間の奥に挟まるように隠れて、休眠状態になります。夏の須磨海岸に海水浴に来て、マナマコの姿を見かけたことがない人が大半だと思われています。これがその理由です。こんな時も、キャッチ結合組織が役立ちます。体の形を岩の隙間にピッタリと合わせて変えることができるので、どんな隙間でも入り込み、また、簡単には引っ張り出されません。キャッチ結合組織は留め金の付いた積み木のようなものです。留め金を外して体の形を変え、また留め金を掛けるとその形を維持するのにエネルギーを使いません。私たちは腕を曲げておくだけでもエネルギーを使い、だんだん疲れてきて腕を伸ばしたくなります。マナマコの場合、体を曲げておくだけなら、全く疲れることがないのです。タッチング水槽でも石のようにほとんど動かないマナマコ。それは、省エネに徹することを選んだ究極の進化の姿なのです。

カワムツとヌمامツ

魚類飼育課 長田信人

私の出身地は兵庫県東部の西播磨地域にあり、見渡す限りに田んぼが広がる田舎です。豊かな自然の中でも川が一番の遊び場で、網を使わず、手づかみで魚を捕まえて遊んでいました。その当時、よく捕まえた魚がカワムツです。



↑カワムツ



↑ヌمامツ

数を数えることは難しく、ひれの色の方が見分けやすい特徴といえます。また、ヌمامツはスマートな体つきで口先が尖っているため、頭や目が小さく

見え、カワムツを見慣れた人にとっては、その違いの方が目に付きます。カワムツは中国本土や朝鮮半島などでも見られますが、ヌمامツは日本国内でしか確認されていません。これまでの調査や研究がカワムツを対象としていたため、ヌمامツとしての調査はほとんど行われておらず、生態や生息地なども含めて、今後新たな発見があるかもしれません。神戸市内ではヌمامツの生息が確認されている河川はまだ少なく、ほとんどがカワムツとされています。でも、ひよっとしたら今までカワムツだと思っていた魚が、実はヌمامツだったりするかもしれません。皆さんもぜひともヌمامツを見つけて、水族園に知らせてください。見分けるポイントはひれの色と頭の形です。

少ない上に、ヌمامツがカワムツと区別されるようになってまだ歴史が浅いからなのです。そのため、本当はヌمامツでもカワムツと記録されていることが多いのです。もともと、カワムツの中に少し変わったものがあることは1969年に初めて指摘され、2003年にカワムツから独立し、新種としてヌمامツが記載されました。では、その違いをどのように区別するのでしょうか。「日本産魚類検索図鑑(第三版)」では、側線の鱗の枚数(ヌمامツ:53以上、カワムツ:51以下)や臀びれの分枝軟条数(ヌمامツ:9、カワムツ:10)、胸びれと腹びれの前縁の色(ヌمامツ:桃色、カワムツ:薄黄色)が判別の基準として記載されています。しかしながら、ぱっと見て魚の鱗や分枝軟条の

見え、カワムツを見慣れた人にとっては、その違いの方が目に付きます。カワムツは中国本土や朝鮮半島などでも見られますが、ヌمامツは日本国内でしか確認されていません。これまでの調査や研究がカワムツを対象としていたため、ヌمامツとしての調査はほとんど行われておらず、生態や生息地なども含めて、今後新たな発見があるかもしれません。神戸市内ではヌمامツの生息が確認されている河川はまだ少なく、ほとんどがカワムツとされています。でも、ひよっとしたら今までカワムツだと思っていた魚が、実はヌمامツだったりするかもしれません。皆さんもぜひともヌمامツを見つけて、水族園に知らせてください。見分けるポイントはひれの色と頭の形です。

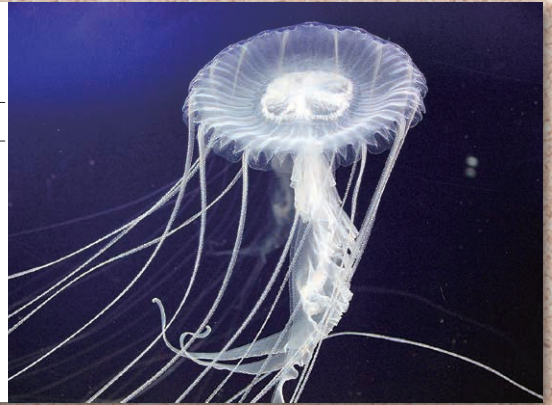
アマクサクラゲ

Sanderia malayensis

無脊椎

房総半島以南の太平洋沿岸,富山県以南の日本海~東シナ海沿岸,瀬戸内海;インド・西太平洋の熱帯~暖温帯。

九州の天草地方でよく見られることから名付けられたクラゲで、傘は直径10cmほどになる。傘の縁から16本の長い触手が、また傘の中央からは、ひだのある4本の口腕がそれぞれ伸びる。刺胞は触手だけでなく、傘の表面にも多数ある。刺胞毒が強いため、刺されると炎症が起き、ひどい場合は患部が壊死する。他のクラゲを捕食する代表的なクラゲで、当園ではミズクラゲを適当な大きさの角切りにして与えている。大きな餌でも飲み込めるが、重さで水槽の底に沈むことがあるため、餌の大きさと水流の加減に工夫が必要である。 [宮嶋 彩]



キハツソク

Diploprion bifasciatum

海水魚

佐渡島以南および相模湾以南の日本沿岸;済州島,中国東シナ海~南シナ海沿岸,インド・西太平洋。

岩礁域やサンゴ礁域に生息し、全長約20cmになるハタの仲間。体表粘液で海水がせつけんのように泡立つことから英名で“Barred soapfish (=縞のある石鰈魚)”と呼ばれる。外敵に襲われた際、有毒なグラミスチンを含むこの粘液を大量に分泌し、捕食者から逃れる。ストレスが原因でも粘液を分泌することがあり、輸送時に自身の毒で中毒死することもあるため、取り扱いには注意を要する。名前は、身が固く、煮付けて食べるのに薪を8束も必要としたことから、「木八束」になったとされている。 [今北大介]



ファロウェラ・ビッタータ

Farlowella vittata

淡水魚

オリノコ川水系(南米)。

吸盤状に発達した口を持つナマズの仲間。夜行性で、昼間は落ち葉が堆積した場所などでほとんど動かないため、細長い体は色合いと相まって、まるで枯れ枝にしが見えない。植物食傾向の強い雑食性で、藻類をはじめ、落ち葉やプランクトン、水生昆虫などを食べる。成熟すると、オスの吻部はメスに比べて幅が広がり、ヒゲ状の突起に覆われる。産卵は雨季に行われ、水中に沈んだ草木の垂直部分に、楕円形の卵を30~60個産み付ける。卵が孵化するまで、オスは卵のそばを離れず、時折、新鮮な水を胸びれで仰いで送り込みながら保護をする。 [田中裕士]



タイリクバラタナゴ

Rhodeus ocellatus ocellatus

淡水魚

日本列島,琉球列島(どちらも人為分布);揚子江水系を中心とするアジア大陸東部。

平野部の池や川、用水路などに生息し、ドブガイをはじめとする二枚貝の鰓の中に産卵する。1940年代に中国から日本の関東地方に導入された食用のソウギョーに混ざり、移入した。その後、アユなどの種苗への混入や産卵された貝類の移植、観賞魚としての流通により日本各地へと分布が拡大した。本種と日本在来のニッポンバラタナゴは亜種の関係にあり、容易に交雑し、遺伝子のかく乱を起こす。また他のタナゴ亜科魚類とも産卵場となる二枚貝を奪い合うなど、在来の種に与える影響が大きいため、「日本の侵略的外来種ワースト100」に指定されている。 [笹井隆秀]



ペーシュ・カシヨーロ

Hydrolycus scomberoides

淡水魚

アマゾン川流域(南米)。

最大で全長100cmを超える大型のカラシンの仲間。下顎に淡水魚の中で最も大きな2本の牙を持ち、普段はその牙を上顎に開いた穴に収めて口を閉じている。「カシヨーロ」とはポルトガル語で犬を意味し、その大きな牙から犬が連想されたことに由来する。幼魚の時は群れで生活し、魚やエビを捕食するが、成魚になると単独生活を好む傾向があり、魚食性が強くなる。普段は活発に泳ぐことはなく、頭を下げた姿勢のまま漂い、獲物が近づくと大きなその牙を使って素早く襲い掛かる。 [宮地真央]



本館

さかなライブ劇場

世界のさかな館

アマゾン館



知られていないけれど 一番身近な小さなクジラ

—アンケート調査から見えてきた スナメリの認知度—

須 磨海浜水族園では、スナメリという鯨類の調査研究活動を続けています。大阪湾や播磨灘、備讃海域とその周辺海域を主な調査海域とし、目視調査、死亡個体の調査、聞き取り調査を行っています。目視調査では延々と海を眺めてスナメリを探します。死亡個体の調査では、打ち上がったスナメリの死体と黙々とにらめっこします。

しかし、目視調査や死体の調査では得られるデータは限られてきます。その点、聞き取り調査では漁師や船乗りなど海で働く人や釣り人をはじめ、海で出会う人たちから話を聞くことができるので、「スナメリを見た」という情報のみならず「見ない」という情報まで、実に多くの情報を集めることができます。また、スナメリに対する認知も知ることができます。哺乳類だと知っている人、魚類だと思っている人、「スナメリ」という名称ではなくその地域での地方名で認識している人、そして、そのような生きものがいることを全く知らない人など、何かしら海に関わりのある人であってもスナメリに対する認知はさまざまだということがうかがい知れます。

瀬戸内海、特に播磨灘や大阪湾に暮らすスナメリの生息数はそれほど多くありませんが、瀬戸内海で生息が確認されている唯一の鯨類です。マッコウクジラやザトウクジ

ラのようにウォッチングの対象となることはほとんどありませんが、水族館でアクリル越しに見るその姿には愛嬌があります。とある水族館でスナメリ水槽の前でたたずんでいると、水槽の中で泳ぐスナメリを見た人たちは「かわいい」という声を耳にしました。ですが、その一方で「なにこれ」「瀬戸内海に、こんなのいるの?」という声も耳に入ってきました。

そこで、聞き取り調査では、出会う機会の少ない人たちがどの程度その生きものを認識しているのかを把握するため、日常生活においてスナメリとほとんど縁がないけれど興味は持っていると思われる人たちと、ほとんど縁がないと思われる人を対象にアンケート調査を実施しました。

【アンケート1】

岡山県瀬戸内市で2010年10月～2011年8月に数回、「牛窓のスナメリを見守る会」の方たちと一緒にスナメリウォッチングを実施した際に、ウォッチング参加者を対象にアンケートを実施しました。質問内容はとてもシンプルで、①スナメリを見たことがありますか?②どこで見ましたか?の2つです。対象となったのは、3歳から75歳までの165人です。

その結果、見たことがある人は28.5%

(47人)、見たことがない人は66.7%(110人)、未回答は4.8%(8人)で、半数以上の人は見たことがないと答えました。見たことがある人を対象に、スナメリを見た場所を尋ねると、海が14.9%(7人)、水族館が59.6%(28人)、図鑑とテレビがそれぞれ4.3%(各2人)、その他2.1%(1人)、未回答14.9%(7人)でした。スナメリを見たことがあると答えた人の60%は水族館で見ました(図1)。

ウォッチングに積極的に参加される方々なので、スナメリに対する関心は高いと思われましたが、それでも、海で野生のスナメリを見たことがある人は、アンケート回答者全体のわずか4%ほどでした。

【アンケート2】

神戸市内の大学1年生(幼児教育系、女子)40人を対象に2014年5月に、①スナメリを知っていますか?②スナメリを見たことがありますか?③どこでスナメリを見ましたか?という内容でアンケートを実施しました。

その結果、知っていると答えた学生は全体の27.5%(11人)で、70%の学生たちはスナメリを知りませんでした。見たことがあると答えた学生は17.5%(7人)で、見た場所の多くは水族館で、スナメリが生活している海で見たことがあると答えた学生は誰

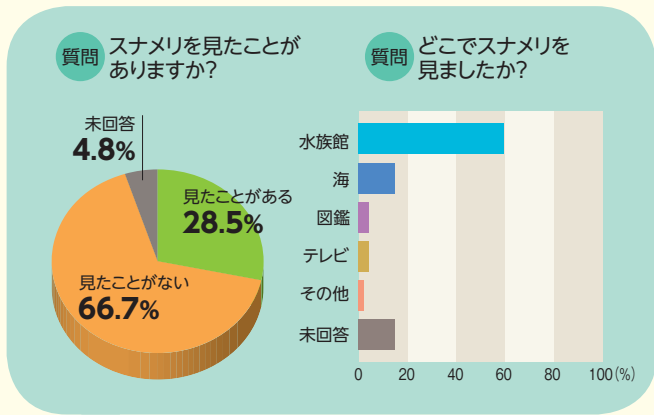


図1 スナメリウォッチングに参加した人を対象に実施したアンケート結果

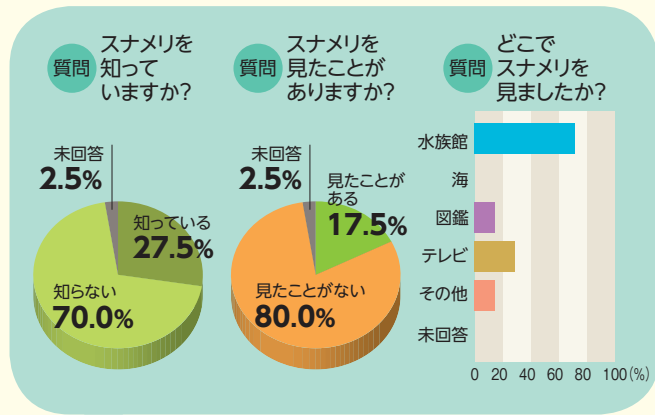


図2 大学生を対象に実施したアンケート結果

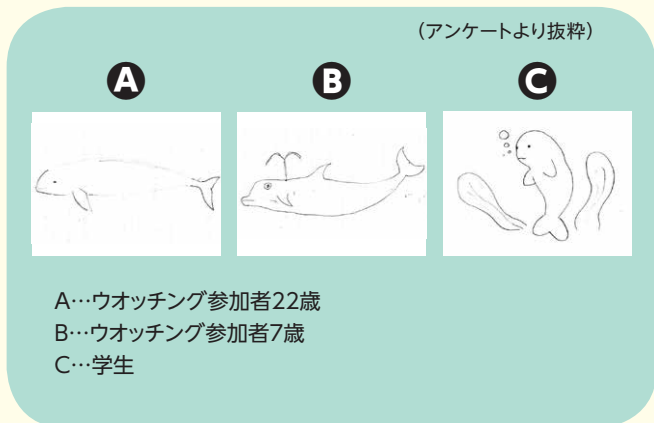


図3 スナメリを知っていると答えた人が描いたスナメリ

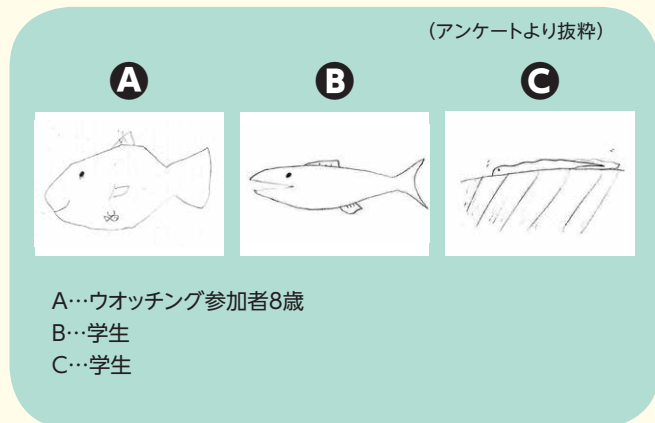


図4 スナメリを見たことがない、知らないと答えた人が描いたスナメリ

もいませんでした(図2)。

【あなたが思うスナメリは?】

さらに、対象となった人たちに、スナメリの絵を描いてもらいました。スナメリを知っている人、見たことのある人は、その姿を思い出しながら、知らない人は想像で描いてもらいました。

すると、知っている、見たことがあると答えた人の中には、スナメリの特徴をしっかりと捉えている絵がありました。頭は丸く吻と背びれがなく、尾びれは水平についているというような特徴です。一方で、吻や背びれがあってハンドウイルカのように見えるもの、潮吹きをイメージしたクジラに見えるものもありました(図3)。また、知らない人が描いた絵からは、魚をイメージするような絵や、「スナ」からのイメージなのか、海底にくっ付いている生きものの絵も見られました(図4)。

よく食卓に上がるニワトリを描こうとしても、その特徴を捉えるのは意外に難しいものです。ましてや、ほんの少ししか見たことがないスナメリの絵については、正確なものからほほ笑ましいものまで、ずいぶんと

幅があることがわかります。

【アンケートを振り返って】

今回のアンケート調査では、調査現場では出会う機会が少ないと考えられる人々を対象に実施しました。結果は、知っている学生は約3割、見たことがある人はウォッチング参加者も学生も2割前後と、スナメリに対する認知度の低さが見て取れました。そして、スナメリとの出会いの場の多くは水族館で、野生のスナメリを見たことがあるという人はどちらもほんの一握りということがわかりました。さらに、スナメリを知っていると答えた人でも、描いた絵を見ていると、スナメリというよりもイルカに近い絵を描く人もおり、見たことがある生きものであるにもかかわらず、特徴を捉えた絵を描くというのは難しいことがうかがわれました。

出会いの場として多かった水族館では、海では見ることの難しい水中での様子をアクリル越しに容易に見ることができます。スナメリ独特のどことなくニンマリ笑ったような、なんともいえない愛嬌のある顔が見られるのも水族館ならではの、姿形のみならず、表情や泳ぐ様子が知れる場所です。一

方、野生のスナメリはというと、水面に出す姿のほとんどは呼吸の時の一瞬です。そのため、いつでも見られるわけではありませんが、磯や防波堤で竿を振れば、仕掛けが飛ぶくらいの距離でもポコッと姿を見せることがあり、見つけたときの感動はひとしおです。さらに、海での出会いは、スナメリが暮らす環境がどのような場所なのかを、五感で感じることができます。このように、水族館での出会いも、海での出会いも、スナメリを知る上ではどちらも大切な場所であり、スナメリと出合える場所が増えれば、スナメリの認知度も上がってくるのではないかと考えられます。

身近な海(沿岸域)で暮らしているスナメリは、私たち人間活動の影響を受けやすく、沿岸環境の生態系における微妙なバランスの中に存在している生きものともいえます。つまり、スナメリを知ることは、沿岸環境を知ることにもつながってきます。認知度が上がり、ニンマリ顔のスナメリファンが増えれば、今まで以上にスナメリに関する情報が増え、さらには、スナメリのみならず、沿岸環境の保全にもつながってくるのではないかと考えます。

※現在、須磨海浜水族園ではスナメリの飼育はしていません。

ウミガメの国際シンポジウムで訪れたトルコ共和国

トルコ共和国に行ってきました。地中海に面したムーラ県のドラマンで2015年4月に開催された、「第35回 国際ウミガメシンポジウム」に参加するためです。その名の通り、ウミガメを唯一のキーワードとして、生物学、保全・保護、環境教育など、ありとあらゆる話題が昼夜を問わず提供され、研究者を中心にNGO、教育機関、各国政府関係者などさまざまな人が一堂に会する国際学会です(写真1、2)。本会議だけで323題もの発表があり、もともと多かった、遺伝子を使った地域集団の特徴を調べた研究や、体に蓄積した元素比から食べた餌を推定する研究に加えて、記録機器をウミガメに装着して行動を調べるパイオロギングという研究手法も増えてきたのが印象的でした。衛星発信機もほとんど小型化しており、研究を支援する科学技術の進歩を実感しました。私も漁業者らと開発中のウミガメ脱出装置について口



↑写真3 アカウミガメの産卵地タートルビーチ



↑写真4 タートルビーチに向かう川沿いの景色

頭発表をしてきました。スマスイや日本の積極的な取り組みが評価され、広く周知もできた良い機会となりました。また、会期中に開催された国際自然保護連合(IUCN)のウミガメ専門部会にも委員として参加し、レッドリストでのアカウミガメの再評価についても話し合いました。その結果については、絶滅危惧IB類(EN)から絶滅危惧II類(VU)にランクダウンしたことをニュースで聞いた人もいらっしゃるかもしれません。

ところで、トルコにはタートルビーチという地中海全体で2番目に大きなアカウミガメの産卵地があります(写真3)。この機会にぜひ見てみたい!と、足を延ばしてきました。この砂浜は観光地化されていて、ボートで1時間ほ

ど川を下って向かうのですが、川岸を含め、人工的な護岸や舗装がほとんどありません(写真4)。ほとんど自然のままなのです。観光地化されると道路が整備されたり柵が付けられたりする日本を思うと、その姿勢に感動するとともに、うらやましくも悲しくもなりました。

一方で、トルコの最大都市イスタンブールの街を歩くと、真新しいショッピングモールがいくつもあり、今まさに発展しつつあるのだと実感しました。街中には観光客が溢れ、治安が悪化している雰囲気は当時ありませんでした。有名なブルーモスクでは敬虔なムスリムの人々が祈りを捧げ、神聖な場所であることを肌で感じるとともに、数多の観光客を受け入れる懐の深さにも敬服してしまいます(写真5)。オスマン帝国やシルクロードを通じた文化の中心地であった自負と誇りが古きを守り、新しさを受け入れる土台にあるのかもしれませんが、一方で、電車賃をねだる裸足の少年や、子どものミルク代をせがむ若い女性など、発展から取り残された人々も目に付きましました。スマスイで出会う子どもたちの輝いた目とは対照的な、私の言葉では表現できない彼らの目もまた、忘れられそうにありません。

↓写真5 ブルーモスク内を見る観光客と奥で祈りを捧げるムスリム



↑写真1 学会賞授賞式の様子



↑写真2 ポスター発表の会場

「私が水族館で働く理由」



海獣飼育課
杉村 亮

PROFILE

1985年下関市生まれ。下関市の工業高校卒業後、ドルフィントレーナーを夢見て大阪の専門学校へ入学。卒業式前日に就職が決まり、水族館業界へ。9年間ほど田舎の水族館で勤務した後、2014年10月に都会である神戸の須磨海浜水族園へ。未だに片側5車線もある国道2号線にビビる。

フグで有名な下関で生まれ育った私は、幼い頃から親の影響もあり、海が大好きでした。中学生時代の修学旅行で、九州のとある水族館のバックヤードを見学したことをきっかけに、動物と一緒に仕事がしたいと思うようになりました。「海が好き+動物と一緒に仕事がしたい=水族館」と考え、水族館業界を目指し、進路を考えました。

高校は、「将来的に資格持っていれば就職に有利だ」と勝手に思い込んでいたので、何かと国家資格が取得できる工業高校の電気科を選択し、動物とは直接関係のない資格をそれぞれ取得しました。当時の担任の先生に「動物業界を目指すヤツが工業高校に何しにきたんだ」と言われたことを今でも覚えています。

高校卒業後は水族館を目指すための専門学校に入学し、水族館実習とその資金源を作るためのバイトに明け暮れました。そして卒業式の前日、念願がなつて水族館に就職が決まります。

入社して2、3年のうちは作業や日常業務をこなすことで精一杯でしたが、4年、5年とたつにつれて少しずつ気持ちに余裕ができていきます。そんなある日、上司から「スギ(当時のあだ名)はなんで水族館で働いてんの?なんでショーとかふれあいイベントをやっているの?」と、不意に聞かれました。私はすぐに答えることができず、それ以降はずっとこのことについて考える毎日。なぜイルカ・アシカショーを行うのか、なぜお客さまに動物とふれあってもらおうのか。風呂に入っている間や出勤中もずっと考えていると1つの結論に達しました。それは、「その動物のことを知っていただくため」「その動物のファンになってもらい、関心を持ってもらうため」です。

ではその目的を達成するためには何をすればいいのか。次はそこを考えるようになり、さらに「水族館だからこそ体験できる方法で楽しんでいただきたい」と思うようにもなりました。

そこで、私は祝日に着目しました。祝日にはそれぞれ趣旨があり、その趣旨にちなんださまざまなイベントが各地で開催されています。それを水族館なりのやり方で実施するとしたらどういったことができるか考え、実施しました。例えば、体育の日には「アシカとボールバランス対決!」と題し、お客さまとアシカでどちらが長い時間ボール(お客さまは手にほうき)を乗せてバランスをとっているかを競うイベントを実施しました。ただ競うだけではなく、イベントの最後に「なんでアシカがこんなにも長い時間ボールバランスができるのかというね…」と解説をすることで、楽しんでもらいながらアシカのバランス能力の高さを伝えることができます。祝

日だけでなく、他にも父の日、母の日などの趣旨にちなんだイベントを企画しました。

水族館業界に入ったのが20歳の春。それから10年たった今、田舎の水族館から須磨海浜水族園に移ってきました。三十路の新人です。当園ではこの歳まで未経験だったペンギンの飼育を担当しており、生態や行動といったペンギンの面白さにどっぷりハマっています。今はこのペンギンの魅力をどうやってお客さまに知ってもらおうか模索中です。この春には新たなペンギンエリアが完成します。まだまだ若い者には負けてられません。

三十路の新人、今日も頑張ります。



↑卵から孵って20日目マゼランペンギンのヒナ



↑カリフォルニアアシカとお客様によるバランス対決!(前職場時代)

スマスイ思い出館

約5年ぶりに子どもたちと来ました。小学生3年生と1年生となり、当時はイルカさんを怖がっていたのに「イルカショーが見たい」と喜んでいました。「大きくなったなあ」と実感しました。



高砂市 下野様

大水槽の中にあるエイを描きました。エイの裏が人の顔みたいになっていて「優しい顔をしているな」と思いました。その他にもいろいろな顔があり、とても楽しかったです。



奈良市 大橋様

エピソード募集!

スマスイでの思い出の写真とそのとっておきのエピソードを紹介してみませんか。住所・氏名・連絡先をご記入の上、写真と文章(200字以内)を添えて郵送またはメールでご応募ください。

宛先/〒654-0049 神戸市須磨区若宮町1-3-5
神戸市立須磨海浜水族園 スマスイ思い出館募集係
Eメール info@sumasui.jp

春のイベント情報

春期特別展

カニ研究クラブ

「第6回神戸賞授賞研究(社会性カニ)」を記念して、いろいろな環境に適応したカニの世界を紹介します。カニ大好き飼育スタッフ厳選の面白いカニが大集合!これを見れば食べる以外でも、カニの大ファンになること間違いなしです。

開催期間 ▶ 3月19日(土)~5月29日(日)



生きものスクール

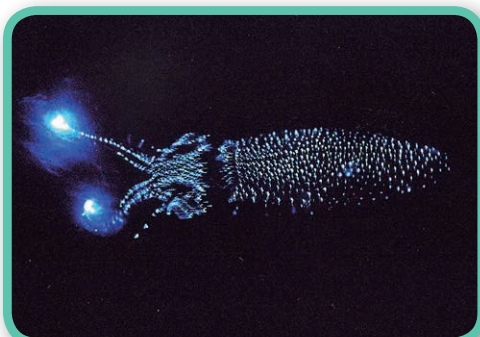
海的神秘! ホタルイカの発光をみよう!

富山湾の春の風物詩「ホタルイカ」が実際に光っているところを鑑賞できます。有名な腕発光はもちろん、普段は見ることのできない皮膚発光器の光もご覧いただけます。

開催日時 ▶ 4月29日(金・祝)、5月1日(日)、
3日(火・祝)、4日(水・祝)

参加費 ▶ 500円(別途入園料が必要)

募集期間 ▶ 3月22日(火)~4月11日(月)必着



●各イベントの詳細についてはホームページでご確認ください

開園時間 ▶ 9時~17時(入園は閉園の1時間前まで) ※7月23日(土)から8月31日(水)は20時まで

休園日 ▶ 3月~11月/無休 12月~2月/水曜(祝休日、年末年始を除く)

※別途工事休園あり

EVENT INFORMATION

生きものスクール

神戸のカエル探検隊

カエルの大合唱のときに合わせて、野外でカエルの観察イベントを実施します。実際に鳴いているカエルを観察するだけでなく、飼育スタッフが現地で身体の仕組みなども紹介します。カエルに詳しくなりません。

実施日時 ▶ 6月4日(土) 18時30分~20時

※雨天順延(予備日:6月11日(土)同時刻)

対象 ▶ 小学生以上(小学生は保護者同伴、5組)

参加費 ▶ 500円

募集期間 ▶ 4月26日(火)~5月16日(月)必着



第6回 神戸賞授賞記念講演会

6人目の受賞者は、ジャマイカの森にすむ子育てをするカニの生態を明らかにしたRudolf Diesel博士に決定。カニの珍しい子育てについて語る講演会を開催します(日本語通訳付き)。後援:神戸新聞社

開催日時 ▶ 5月22日(日) 13時30分~
(受付13時~)

開催場所 ▶ ホテルオークラ神戸1階 松風の間

参加費 ▶ 無料(事前申し込みが必要)



スマスイ

検索

<http://sumasui.jp>